

著者略歴

一九三〇年東京生れ。明治大学卒業。国文学者・評論家、明治大学文学部講師。日本文芸家協会、日本ペンクラブ会員。「四季」「日本浪漫派」を對象とした昭和十年代の文学と思想を論じた研究・評論が多い。著作に「伊東神楽」「立原道造の世界」「三島由紀夫少年詩」「文明開化の詩」その他がある。

中村真一郎とその時代

定価二、〇〇〇円

昭和五十八年十一月五日 印刷

昭和五十八年十一月五日 発行

著者 小^お川^{がわ}和^わ佑^{ゆう}

発行者 加藤利明

発行所 林道舎

362 埼玉県上尾市緑丘三一七―三

振替 東京九―二一八〇八

電〇四八七―七一―五〇五四

印刷 三協鈴木印刷

製本 辻本製本所

中村真一郎とその時代
目次

I 幻覚の饗宴

1 幻覚の饗宴

中村真一郎の梶井基次郎論〔九〕 ボードレリアンとしての梶井基次郎〔一〇〕
視覚者としての文学〔二四〕 「桜の樹の下には」〔二六〕
幻想と反世界〔三〇〕 夢、あるいは想像力について〔三三〕
「死の影の下に」の意味〔三五〕

2 マチネ・ポエティック

マチネの詩〔三七〕 一つの時代〔三六〕 その史的位置〔四〇〕

3 中村真一郎の性と思想

個有の思想〔四三〕 物語への憧れ〔四六〕
その性描写〔四八〕 オンデーヌ志向〔五二〕

II 作家以前のの中村真一郎

1 作家の幼年

死の音楽〔五五〕 海に降る雪〔六四〕
心象の海〔六八〕 幼年〔七二〕

九 七

三 三

五 五

五 五

2 青春と時代

目覚め〔七六〕 父の死・青春〔七九〕 時代〔八三〕

立原道造の死〔九四〕 高見順〔九八〕

七六

III 中村真一郎とその時代

1 『恋の泉』——近代の日本と知識人

『恋の泉』〔一〇三〕 風俗の最前線〔一〇五〕

夢の構築・作家の想像性〔一〇五〕 小説の方法・小説のなかの時制〔一二四〕

反私小説の中の主人公、民部兼広〔二二〇〕 日本の近代と知識人〔二三三〕

八〇年代の小説への架橋〔二三七〕 『恋の泉』における性の思想〔二三三〕

筆者自身のためのモノローグ〔一〕〔二四二〕

一〇三

2 『雲のゆき来』をめぐる——思想としての性

筆者自身のためのモノローグ〔二〕〔二四七〕

「うまく作られた不幸」に関する考察〔二五五〕

時間・劇中劇の問題点〔二五五〕 メタモルフオーゼ・小説の手法〔二五八〕

ブルーノ・タウト〔二六〇〕 小説の魅力〔二七〇〕

筆者自身のためのモノローグ〔三〕〔二七五〕

二四七

一〇一

ある空想・中村真一郎研究について〔二七〕 思想としての「性」〔二八〕

3 『四季』の意味——回帰する青春

一七

小説の失権時代〔二七〕 続・小説の失権時代〔二九〕

老年という文学の主題〔二九〕 全体小説としての『四季』〔二七〕

回帰する青春〔三〇〕 筆者自身のためのモノローグ〔四〕〔二九〕

記憶の迷路へ〔三〇〕 私小説の中の青春〔三二〕

あとがき〔三六〕

中村真一郎とその時代

I
幻覚の饗宴

1 幻覚の饗宴

——梶井基次郎と中村真一郎——

中村真一郎の梶井基次郎論

かつて、中村真一郎は筑摩版「現代日本文学全集」第四十三巻の巻末解説で、次のように論述した。「……梶井基次郎とは何か。二十年代の後半から三十年代にかけて、短い独特な詩的散文を幾篇か書いて夭折した、純粹な青年である」と。

その文学青年梶井基次郎が三十一歳の短い生涯を大阪で終わったのは一九三二年（昭和七）であるから、この間、既に半世紀の歳月が経っている。

前述の解説の中で、中村真一郎は梶井の文学は第一次大戦後の西欧の激しい文学革命の影響の下に伝統的な文学を否定しながら西欧文学を志向する一群の若い詩人・作家・評論家たちの創造的活力の中から彼の文学もまた創造されたといっている。

同時代の青年たちの眼からは、梶井の文学は「西欧的な作家であると信じられていたらしい」——しかし、中村真一郎はこの文壇的な評価を「甚だ奇妙なもの」と見ている。

梶井基次郎と中村真一郎という組み合わせ自体が、現代の読者には極めて奇異な感を抱かせるに相違ない。この二人の作家の間には、約四分の一世紀の時代的な距りがある。しかし、一方で

I 幻覚の饗宴

は、梶井基次郎・三好達治・堀辰雄という「詩と詩論」の文学革新の時代のいわば正統な継承者としての中村真一郎という側面から見れば、この「梶井・中村」は、同じく昭和前期の夭折者中島敦を挙げて「梶井・中島」とするよりも、文学的必然がより多いと思われる。

中島敦が病没したのは一九四二年（昭和一七）、梶井におくれること十年、三十三歳であった。しかし、ともに夭折者の文学であったというだけで、この二人の作家については遂に相交わる所がない。むしろ、「梶井・中村」であることを積極的に主題として、そこに二人の全く対照的な審美家たちの文学を論ずることで、従来の定説的なこの作家たちの小説評価に新たな再検討を加えるということも、決して無意味なことではなさそうである。

それは日本の近代文学の自然主義的な文学観といった特異な視点に抛らざる、もう少し「小説」、その本質に寄り添ってのテキスト・クリティクということになりはしないであろうか。試みとしては多少とも危険なのであるが、その危険を承知の上で、この論旨を展開してみたい。

ボードレリアンとしての梶井基次郎

最も新しい梶井基次郎の評伝「転位する魂——梶井基次郎」（昭和五二・五、現代教養文庫）の著者鈴木沙那美編の「年譜」では大正十年から十三年にかけて、梶井の生活は放埒を極めて日常が書き込まれている。六年間の三高生活が、この真面目でナイーブなエンジニア志望の少年を、その最初の人生の夢と全く異次元へ誘っていった。

1 幻覚の饗宴

大正末期、同時代の文学青年たちの前に「檸檬」(大正二四・一「青空」)によって出現した梶井基次郎は一人の若いボードレリアンの出現と思われた。それは同時代の青年たちにとってはその危機感・現実意識の具現であった。普通選挙実施と引き替えに治安維持法が施行されている。治安維持法の発効は大正リベリズムの終焉を意味する。彼らは次の時代に非知的な暗黒が重く彼ら自身を圧するであろうことを本能的に予覚していた。そうした暗い傾斜の中に投じられた梶井の「檸檬」は、単なる文学青年の習作である以上に、時代そのものの共感に支えられていた。

しかし、このボードレリアンと目された梶井の作品は、現代の読者の眼から見ると、中村真一郎の指摘のように、西欧的であるよりも、むしろ、その文学は近代小説の伝統の影響が色濃く説き取られるであろう。梶井の文学的感覚は、西欧的であるよりも、より日本的——つまり、日本の摂取した近代の成果である都市文明のそれである。

今、空は悲しいまでに晴れてゐた。そしてその下に町は薨を並べてゐた。

白亜の小学校。土蔵作りの銀行。寺の屋根。そしてここ、西洋菓子の中に詰めてあるカンナ屑めいて、緑色の植物が家々の間から萌え出てゐる。ある家の裏には芭蕉の葉が垂れてゐる。糸杉の巻きあがった葉も見える。重ね綿のやうな恰好に刈られた松も見える。みだりな下葉と新しい若葉で、いい風な緑色の容積を造つてゐる。

遠くに赤いポストが見える。

乳母車なんとかと白くペンキで書いた屋根が見える。

目をうけて赤い切地を張った張物板が、小さく屋根瓦の間に見える。——（「城のある町にて」）

代表作「城のある町にて」の一節である。

ここにある感性は決して西欧的なものではない。むしろ、純粹に日本的なそれである。それからもうひとつ、注目していいことは、この感性が決して病んでいないことである。

梶井基次郎の青春における放埒と退廃生活がその感性を養ったということを否定したいほどの清明さと澄んだ抒情の響きがある。

克明に対象が読者の内部で映像を形成していく描写は日本の自然主義文学の手法の一到達点を思わせる。

——が、しかし、梶井基次郎の文学は藤村の、直哉の、あるいは岩野泡鳴のでもよい。それらの小説と比較した時、小説としてなにを、どれほど残したかということが問題になる。あるいは、梶井の文学が幻視者の文学といわれるのは一点ここにあるのではないか。

右の梶井の文学の特質について中村真一郎は次のように述べている。

……梶井の方法は想像力を拒否する。彼は純粹に視覚的であることを志向する。彼の作品

1 幻覚の饗宴

は、意識が視覚に集中した状態の精細な描写である。そのようにして捉えられた外界は、純粹に感覺的なものであり、感覺的であるが故に、感覺している主体、梶井自身の心の状態の表現となる。梶井の見事にスケッチした小さな事件や小さな風景は、そのようにして同時に、梶井自身の感情や感動や気分やを示している。そしてその彼方には彼自身の世界観が暗示される。……(中村真一郎「梶井・三好・堀」)

この中村真一郎の梶井観は、さきに挙げた「城のある町にて」の一節をそのまま解説することになる。

また、その中村真一郎の古い文学的僚友である福永武彦はこうした梶井観を示している。

梶井の文学は明かに少数者のための文学である。梶井は狭いサークルの中で、少数者のために、或いは彼自身のために作品を書いた。(福永武彦「梶井基次郎——その主題と位置」)

これらの文学論は梶井基次郎というこの作家を、現代の作家である中村・福永がいかに読み、いかに評価したかの例証であるが、こうした梶井の文学の特質はなにによって培われたか。——これは日本の小説という特殊な文学作品を解読する上に極めて興味ある事柄であろう。そこで、しばらく、梶井の作品に焦点を絞って、このことを考えてみたい。

視覚者としての文学

梶井基次郎は眼に見えない多数の読者というものを信じない——純粹な文学創造だけを意図した、今日では殆んど稀な存在になった型の作家である。

かつて、一九五〇年代の頃、梶井基次郎の熱愛者たる青年は、文学仲間の青年から真摯な求道者と目されていた。しかし、七〇年代後半の現代では、梶井の熱愛者は孤独な反世界に生棲していることには変わりないが、その存在そのものが少しばかり滑稽な悲劇という理解に立って、一種の風変わりな人間と見られている。

既に文学そのものが、梶井的な文学生活を許さなくなっているのであった。しかし、そのことよって、かえって、梶井の数少ない作品が、日本の近代文学の原質として、貴重なものになるうとしているのではないか。

視覚者——、あるいはその透徹による幻視者というべき梶井基次郎の精神の形成はいかなるものであるかを知るためには中谷孝雄の「梶井基次郎」をはじめ、伊藤整の「若い詩人の肖像」、小山栄雅の「梶井基次郎」、前出の鈴木沙那美の「転位する魂——梶井基次郎」等に尽くされている。詳細な淀野隆三編「年譜」によって悉知の通り、梶井は資本主義上昇期にある大企業の商社社員を父に持つ比較的豊かな家庭の第三子として生まれた。(注——姉富士、兄謙一があり、基次郎はその名の通り二男であった。この他に芳雄・勇・良吉の三弟があり、謙一・勇の両氏が現存する。因みに、明

1 幻覚の饗宴

治三十三年生まれの彼が仮に生存していたとすれば八十三歳になるはずである)

この「年譜」を眺めているうちに、ひとつ気づいたことがある。それは梶井の母ひさの生い立ちに関する記載であった。

明治維新の変動のなかで、この大阪の旧家に生まれた女性は自己の意志と全く関わりない孤独な生い立ちと、これまた自己の意志と関わりない人生を与えられている。おそらくこの聡明な女性(注―淀野隆三編「年譜」では大阪堂島女学校を首席で卒業とある)は心の深い個所で、孤独を凝視しながら、基次郎らを育てていたのであろう。

梶井の文学に見られる反世界意識と母ひさの精神とはどこかで強靱な連帯を作っていたかも知れぬ。そして、梶井の青春の日を彩どりする放埒の日日は、父宗太郎の享樂的な性格を継承しながら、この母ひさのストイズムをも受け継ぐといった不思議な――これ故人間として魅力ある不均衡な人格を形成したのかも知れぬ。

ともあれ、梶井はこの父宗太郎に暗い記憶しか持たなかったという。彼の孤独な魂はこうして、母から子へと受け継がれていったものではあるまいか。――それが彼をして、視覚者として、その透徹によって幻視者たらしめていった。さらに肺結核という病歴がいつそ彼の孤独を深めていったともいえるであろう。